

2015 DIJON Racing SUPER GT RACE REPORT

44th INTERNATIONAL SUZUKA 1000KM

開催日時 : 2015 年 8 月 29 日~30 日 開催地 : 鈴鹿サーキット (三重県)

ドライバー:Takamori 博士/田中勝輝/柴田優作 マシン名 : DIJON Racing GT-R(日産 GT-R GT3)

参戦クラス:2015 年 SUPER GT SERIES / GT300 クラス

天候 : 予選/曇り

決勝/雨~曇り

路面 : 予選/ドライ

決勝/ウェット~ドライ

入場者数 : 予選/ 26,000 人

決勝/34,000人

練習走行 :クラス 16 位(2 分 01 秒 586)

予選 Q1 : クラス 21 位(2 分 01 秒 110)

予選 Q2 :----

フリー走行:----

決勝 : クラス 15 位(148 周)























CKK













2015年 SUPER GT シリーズ第5戦の舞台は三重県の鈴鹿サーキット。

今年で 44 回目の開催となる鈴鹿サーキット伝統の耐久レース『第 44 回インターナショナル鈴鹿 1000km』は、レー ス距離が通常シリーズ戦の3倍以上だけでなく、天候の変化や真夏の暑さによる過酷なレースとなる。

そのため、ドライバーやマシンのタフネスに加えて、綿密に練られたレース戦略がこのレースを戦い抜く為には重要な 要素となる。

DIJON Racing は、この過酷な 1000km レースに、レギュラードライバーの Takamori 博士と田中勝輝に加えて、第 3 ドライバーに第4戦で DIJON Racing GT-R 47 号車に搭乗した柴田優作を起用し、真夏の 1000Km レースに挑ん だ。

■8月29日(土)公式練習

例年になく早くも秋雨前線が日本列島を席巻し、鈴鹿サーキットは前夜から断続的な大雨となる。

朝方から天候は徐々に回復し、雨は上がるも路面は完全なドライコンディションとはならず、前日の降雨の影響からコー ス上にはまだ水が残っている状況。

9時 20分より行われた公式練習は、まず Takamori 博士がステアリングを握った。

インストレーションラップの後、計測 2 周目には 2 分 04 秒 996 をマーク。GT300 クラス 5 番手につけ、序盤から 好調さをアピールした。

路面も急速に乾き始めたため、第3ドライバーに登録した柴田優作へドライバーチェンジ。

柴田優作も計測して直ぐに2分02秒622をマークして好調さをアピールする。

順調に走行するも他車両回収のために赤旗が提示されたのでピットインして田中勝輝へドライバーチェンジ。

























NISSAN GT-R NISMO GT3





CKK

TAKATA

ヒョウゴベンダ





一時中断となったセッションも再開し、田中勝輝は直ぐにコースイン。

徐々にペースを上げて2分02秒166をマークする。

マシンセットアップも良好と判断し、チームはニュータイヤを装着してアタックラップを指示。

田中勝輝はコースインするも非常にも再び赤旗が提示される。

セッション再開後、田中勝輝は再度アタックラップに入り、2分01秒586を計測。

これまでのチームベストラップの更新に成功する。

次いで Takamori 博士へとドライバー交代し、タイムアタックする予定だったがアウトラップでこれまで経験したことが 無い強い振動がマシンに出たため、すぐさま緊急ピットイン。

マシンチェックしても振動の具体的な問題は発見できなかったため、慎重にマシンチェックしながら再度コースイン。 振動も発生しないため、十分にタイヤに熱入れを行い、アタックラップに入る。

しかし、メインストレートを走行中、アタックラップに入って直ぐに車内で発煙が起こる。

発火の恐れがあることから、Takamori 博士は咄嗟の判断で、1 コーナー手前のコースサイドにマシンを止め、直ぐに メインスイッチを切り、大事には至らなかったが、DIJON Racing の占有走行はこれで終了となってしまった。

続いて行われるサーキットサファリまでに、マシンはメカニック総出での懸命な点検作業が行われるがトラブルは再発 せず、問題点は見つからない。

サーキットサファリでチェック走行を行うために柴田優作がマシンに乗り込み、順調にピットロードを走るも、コース イン直前に、またもや室内で発煙したため、ピットロード出口付近でマシンを止めることとなってしまった。



























CKK

TAKATA

ヒョウゴベンダ







■8月29日(土) 予選Q1

サーキットサファリ終了から予選までのわずかな時間、メカニックの懸命な原因探求作業が行われる。

その結果、過電流が原因とみられる電装部品の内部破損が見つかった。

当該箇所と影響を疑われるいくつかのパーツを交換して予選に備えることにした。

ガレージの中では順調にエンジンも掛かり好調そうなマシンだが、祈るような気持ちで 14 時 30 分から行われた GT300 クラス予選 Q1 セッションに田中勝輝は出走した。

マシンは好調そのものでトラブルは完全に解決した模様。

田中勝輝は7周を計測し、占有走行での自身のベストタイムを更新する2分01秒110をマークする。

しかし、ライバル勢もタイムアップしており、予選 Q1 セッションは GT300 クラス 21 番手となり、Q2 進出は果たせ なかった。

■8月30日(日) 決勝レース

天候は朝から安定せず、雨は降ったり止んだりの状態。

今回は朝のフリー走行が設定されておらず、決勝前のウォームアップ走行が初走行となるが、ウォームアップ走行開始と 同時に小雨が継続的に降り始めて路面は一気にウェットコンディションとなる。

午後 0 時 30 分、 気温 25 度、 路面温度 27 度、 小雨が降る中、 173 周先のチェッカーフラッグを目指して長い決勝レー スのスタートが切られた。

























NISSAN GT-R NISMO GT3





CKK

TAKATA

ヒョウゴベンダ





スタートドライバーを務める Takamori 博士は先の展開も見越し、無理のないペースで周回を重ねていく。

周回数も20周を超えるとコース上の雨量は減っていき、レコードライン上は乾き初め、コースの所々には完全に乾いた 場所も現れてきた。

ウェットタイヤでスタートしたため、コース上の水量が少なくなるとタイヤの磨耗が進み『タイヤがきつくなってきた』 と無線で報告をする Takamori 博士に対し、チーム側は最初のピットストップまでタイヤをもたせるべく、コース上の 水量の多いところをできる限り走行するよう指示を出した。

32 周を終えて Takamori 博士が最初のピットイン。

コース上はハーフウェット状態でドライタイヤで走れるまでに回復していないとの判断により再度レインタイヤを装着 する。

田中勝輝にバトンを託してコースへ復帰した。この田中勝輝のスティント後半、コースコンディションはドライ方向へ と回復していった。

レース開始から2時間が経過した頃、車両回収のためにセーフティーカー(SC)が導入される。

数周のセーフティーカーランを行い隊列が整い、ピットレーンがオープンとなる 61 周目、田中勝輝はピットイン。 柴田優作ヘドライバー交代する。

<u>路面コンディションも回復したことからドライタイヤを装着して柴田優作はコースへ復帰する。</u>

コースに復帰した柴田優作は上位陣と遜色のないタイムで快調に周回を重ねていき、97周目には DIJON Racing GT-R を 13 位まで浮上させてピットイン。Takamori 博士にバトンを委ねる。

























NISSAN GT-R NISMO GT3





CKK







このレース 2回目のスティントを担当した Takamori 博士は 17位でコース復帰した後、好ペースで自身の担当スティ ントを走りきり、123周目にこのレース最後のピットインを行い、田中勝輝へ最後のバトンを託した。

田中勝輝が最終スティントを担当して間も無く、西の空に雨雲が立ち込め始め、西コースでは雨脚が酷くなり始めた。 路面は部分的にウェット状態となり危険な状態となる。

非常に難しいコンディションの中、田中勝輝は快調に DIJON Racing GT-R を操る。

夕闇がコースを包む 18:30 分にレース最大延長時間を迎え、レース終了となる。DIJON Racing48 号車は 148 周を 周回し、GT300 クラス 15 位でチェッカーフラッグを受けた。

次戦の SUPER GT 第6 戦は9月19日にスポーツランド SUGO(宮城県菅生町)で開催されます。 シリーズも後半戦に突入し、さらに激しい戦いが予想されますが、より上位を目指し頑張って参ります。 引き続き皆様のご声援頂けますよう、応援よろしくお願い致します。

































